

# 江戸の粹

— 尾崎久弥コレクション —



## 尾崎久弥氏とそのコレクション

尾崎久弥氏は、明治23年(1890)名古屋に生まれ、81歳で亡くなるまで、終生名古屋を離れることなく、著述、研究活動を行った近世文学の先駆的研究者であるとともに、戯作を中心とした江戸文学の刊本、写本と浮世絵の当代随一のコレクターとしても世に知られた人物です。

青年時代の尾崎氏は、<sup>ふうすい</sup>楓水の名で歌人として知られ、随筆、小説などにも手を染めています。やがて教鞭を執る傍ら浮世絵、江戸文学研究に進み、個人雑誌「江戸文学研究」等を精力的に刊行して坪内逍遙等の激励をうけるなど、大正から昭和の初年頃には、「名古屋に尾崎久弥あり」と世に知られる事となりました。ただし、浮世絵や江戸文学の研究がさかんになったのは、戦後のことです。とくに尾崎氏が収集、研究した江戸末期の浮世絵や絵草紙類は、当時は学問研究の対象とは認められず異端扱いでもありました。

学生時代から短歌雑誌の同人であった若山牧水は、二十歳の青年尾崎氏を「落ちつくことを知らずに、一生をすごしてゆく人の様な気がします。せかせか、せかせかと前ごごみになって、ちょうど落としものでもした人の様に」と評しました。まさしく言い得て妙、16000点を超えるコレクションと生前に刊行された単行本だけでも100を超える著作を残した生涯をみごとに予見していたのです。

尾崎氏のコレクションは、昭和47年(1972)、その死後まもなく蓬左文庫に寄贈され、「尾崎久弥コレクション」と名付けられました。尾張藩御文庫以来、中国、日本の古典を蔵書の中心としてきた蓬左文庫にとって、江戸庶民文芸の宝庫である尾崎コレクションが加わったことは、蓬左文庫の新しい展開を象徴するものでした。

尾崎氏は、多くの希少本、珍本を発掘しています。古書店の片隅に置かれた素人目には紙くずの山からバラバラの状態で二つとない天下の孤本が見つかることもありました。これに表紙をつけて綴じなおし、蘇らせるのは、千代野夫人の仕事でした。

寄贈に際しては、江戸時代の文学書、浮世絵、近代以降の書籍、雑誌に加え、尾崎氏の手紙、新聞・雑誌のきりぬきから出版の内容見本、映画や展覧会のポスターなども含まれ、収集範囲の広さに驚かされます。自身にかかわる資料も含め、すべての資料に尾崎氏なりの整理の手が入っています。コレクションのひとつひとつが、ものを集め、残すことへの執着ともいふべき尾崎氏のひたむきな情熱を我々に伝えているのです。





## 尾崎久弥氏略年譜

年	西曆	年齢	事項
明治23	1890	0	6月28日 名古屋市白川町に生まれる。 少年時代より、ペンネームとして楓水を使用する。
41	1908	18	3月 愛知県立第一中学校卒業。 熱田連中7人と、短歌雑誌「八少女」創刊。同44年まで続く。
43	1910	20	4月 國學院大学高等師範部入学。
44	1911	21	4月 若山牧水等と短歌雑誌「創作」の同人 3月 國學院大学卒業。 12月 志願兵として入隊。
大正元	1912	22	11月 除隊。
2	1913	23	4月 愛知県立第四中学校教諭として豊橋に赴任。以後愛知県立第一中学校、名古屋市立商業学校にて教鞭をとる。 8月 処女歌集「夢を描く」(私家版)刊行。
3~	1914~	24	浮世絵等の収集を始める。
7	1918	28	浮世絵、江戸文学研究に進む。
8	1919	29	小説「雪暗く」「斑」「個の羅列」名古屋新聞に連載。 名古屋新聞・新愛知新聞の青年記者等とともに、総合文芸誌「胎動」を刊行。
9	1920	30	3月 研究の秘書役を勤めた吉川千代野と結婚、 六男七女を儲ける。
11	1922	32	10月 個人研究誌「江戸軟派研究」創刊。昭和3年10月からは、「江戸文学研究」と改題して、同7年1月まで刊行。
12	1923	33	1月 ペンネーム楓水をやめ、本名久弥で執筆を開始。
14	1924	34	6月8日 「江戸軟派雑考」(春陽堂)刊。
昭和3	1928	38	9月15日 「江戸軟文学考異」(中西書房)刊。
4~17	1929~42	39~52	旧友折口信夫の推薦により國學院大学講師として東京へ通う。
10	1935	45	3月30日 「江戸小説研究」(弘道閣)刊。
10~	1935~	45~	私立東邦商業学校教諭
16~20	1941~45	51~55	名古屋叢書編集委員 (戦争により中断)
21~23	1946~48	56~58	東邦商業高等学校校長を勤める。
22~	1947~	57~	名古屋史跡名勝調査保存委員会 (のち名古屋市文化財調査委員会) 委員。
25	1950	60	5月3日 「江戸文学および郷土史に対する貢献」により第3回中日文化賞受賞。
26・27	1951・52	61・62	愛知県および同県教育委員会より文化面の貢献者として表彰
28	1953	63	4月~ 名古屋商科大学教授
34~38	1959~63	69~73	名古屋叢書編集委員
39~45	1964~70	74~80	名古屋叢書続編編集委員
40	1965	75	東邦学園短期大学教授
41	1966	76	勲五等 (瑞宝章) をうける。
47	1972	81	6月2日 逝去 (81才)



## 江戸の戯作文学

黄表紙・洒落本・滑稽本・人情本・合巻・読本

尾崎コレクションの江戸文芸書を代表するのが「洒落本」「黄表紙」をはじめとする江戸の戯作文学書です。ふたつとない稀覯本の多いことで知られる「洒落本」、美本揃いの「合巻」など名品、珍本の宝庫です。

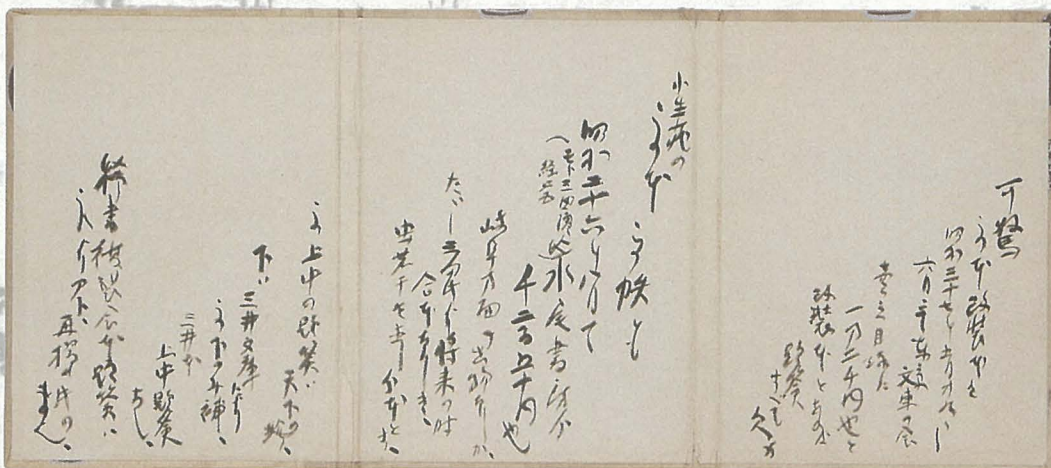
また、尾崎氏は、地方を舞台とした地方の作者による「洒落本」や「滑稽本」を「郷土本」と名付けて、「田舎人自身が田舎を描ける作品、言い換えたら郷土作者が自分の郷土を自ら描いた郷土色即ち地方色の濃厚な作品」と定義し、精力的に収集し、その範囲は全国に及んでいます。氏が収集した「郷土本」には、自らが発掘した原稿本や写本でしか伝わらない二つとない天下の孤本が揃っています。

- 黄表紙 シャレや流行語を多用し、荒唐無稽な筋立てで世相や事件をテーマにした大人向け娯楽絵本。
- 洒落本 遊郭を舞台に、主として客と遊女の遊興を描いた文学。通（粋）を理想とし、遊郭の風俗や粋と野暮（通と不通）の対比を笑いを交えて滑稽に描いた。
- 滑稽本 庶民生活を題材に、くすぐりの笑いや駄洒落を主体とする笑いの文学。
- 人情本 女性向け恋愛長編小説。多くは一人の男性に二人または三人の女性を配して三角関係以上の恋愛の種々相を描いた。
- 合巻 挿絵と文章が渾然一体となった娯楽長編絵本。内容とともに表紙、挿絵、装丁など造本全体のデザインが重視された。
- 読本 封建道徳を軸に、複雑な筋立てが壮大に展開する、挿絵入り長編小説。

※18世紀半ばに江戸で生まれ、幕末に至る江戸の戯作文学は、風刺精神、批判精神に富んだ「黄表紙」や「洒落本」の流行が幕府の取り締まり強化によって衰退し、読者の大衆化や長編化により、滑稽本・人情本・合巻・読本が江戸後期、幕末の大衆文学を代表した。

### 凡例

- 1 本書は、蓬左文庫で開催した「江戸の粋－尾崎久弥コレクション－」（会期平成24年4月14日～5月27日）に展示した尾崎コレクションのうち、江戸戯作文学書および浮世絵の代表的作品について解説を加えたものである。
- 2 掲載した作品の内、江戸戯作文学書は、名古屋市蓬左文庫の所蔵、浮世絵は名古屋市博物館の所蔵である。
- 3 本書の執筆、編集は名古屋市蓬左文庫が行った。なお、浮世絵の解説については、徳川美術館主任学芸員吉川美穂が執筆した。



江戸生艶氣樺焼 3巻3冊

山東京伝作・画 天明5年(1785)刊

風刺、滑稽、擬人化などの手法をもちいた絵入り小説「黄表紙」の代表的傑作。山東京伝を戯作者として一躍有名にした作品である。醜男ながらうぬぼれの強い艶二郎を中心に、道楽者の北里喜之介、太鼓医者のわる井志庵の三人の馬鹿さ加減が描かれる。「艶二郎」はうぬぼれ男の代名詞となり、その顔の奇妙な形の鼻は「京伝鼻」とも称せられた。

本書は、初版本で、現在ではこの一冊しか確認されていない貴重な一組。尾崎氏自慢の一冊であり、その心情は、帙の裏に記された購入の経緯や価値、珍本であることのメモからも窺われる。



寛政の綱紀肅正政策後流行した敵討物の黄表紙である。復讐の前世と報復の現世に分け、まじめな敵討物を黄表紙風に洒落た扱いにしている。

脛膏薬という題名は、軽妙な機知と滑稽を生命とする江戸の黄表紙がすたれ、敵討物が流行する時勢を嘆き、敵討物に飛びつく版元を流行物に移ろいやすく、何にでもべったりな脛膏薬と罵り、また引き受ける自分も脛膏薬だと序文で自ら記している。

おやのかたきうちまたこうやく  
親讎脛膏薬 1冊

式亭三馬作 一柳斎豊広画 刊 (文化2年(1805)序)



高力種信(猿猴庵)作の黄表紙。種信は、尾張藩士で、名古屋城下を中心にこの地方の風俗を自筆の絵と文章で描いた著作を数多く残した。猿猴庵作の『東街便覧図略』の完成を祝って、東海道の諸名物が作者のところに礼にくるという趣向で、山東京伝の作風を真似ているとされる。本書は、猿猴庵自筆の原稿本で、尾崎氏自身が、古書店の反古の中からバラバラの状態で見出し、補修、製本したもの。とくに愛着の深い書物であったようだ。

まぐらはるのめざめ  
きつひむだ枕春乃目覚 1冊

高力種信作・画 寛政8年(1796)自筆

表紙見返メモ  
「この本ツバつけて下をはねるな  
必ず上をはねて下され」



名古屋を舞台とした風刺、滑稽、擬人化などの手法をもちいた絵入り小説である黄表紙風の商品。名古屋鉄砲塚町にあったある家庭騒動をおかしく綴ったもの。作者賤屋祇宗とは、『尾張地名考』の著作などで知られる知多出身の津田正生(1776～1852)である。

にせのけいやくそのてっぽう  
二世契約啞鉄砲 1冊

賤屋祇宗 写 (寛政12年(1800)序)



洒落本の代表作者のひとりである作者と交友仲間（四方赤良・志水燕十・朱楽菅江・雲楽斎）五人男が深川で遊ぶ様子を描いたもの。

竹田出雲の『男伊達五雁金』などで知られる難波の侠客五人男になぞらえ男伊達の意地を深川の客と遊女の駆け引きに移している。

ぐにん おとこいつづけ かりがね  
**愚人贅漢居続借金 1冊**

蓬萊山人作 刊（天明3年(1783)序）



山東京伝の洒落本処女作。表題は、部屋住みの息子の女郎買必読書を意味している。「馴染みの弁」から「女郎の身のうへ」に至る12条の項を立てて、遊客、遊女の心得、手管魂胆の様々、遊興のありかた等を説いている。

むすこべや  
**令子洞房 1冊**

山東京伝(北尾政演)作・画 天明5年(1785)刊



かつてそれぞれに、吉原、深川、品川で遊廓勤めをし、現在は堅気の女房となっているお吉、お仲、お品の三人の女。この三人に三箇所（吉原、深川、品川）の遊廓を比較しながらその遊び、姿、形や言語、風俗客と遊女の気質等を語らせた洒落本。

こけいのさんしょう  
**古契三娼 1冊**

山東京伝(北尾政演)作・画 刊（天明7年(1787)序）



深川の岡場所古市場を舞台に、遊女おとまと三人の客との恋の駆け引きを描いた作品。本書は挿絵が雲母を引いた色摺りで青表紙を持つ初版初刷り本。尾崎氏は「色摺りではじめてあの歌麿の絵-見立普賢(遊女が普賢菩薩の化身であったという口承による見立絵)-が生きているのである。」と述べている。

辰巳婦言 1冊

式亭三馬作 喜多川歌麿画 刊(寛政10年(1798)序)



夜鷹のお跣が、吉原の花魁高尾を相手に、格式にとらわれた吉原の生活を罵倒し、自分の現在の生活の簡易かつ自由さを誇るという物語。文人の余技としての洒落本が定着するきっかけとなった作品。作者泥朗子は、幕臣の山岡俊明。林家の門人で、賀茂真淵門の国学者でもあった。

跣婦人伝 3巻3冊

泥朗子作 宝暦3年(1753)刊



洒落本の要素がある見立て絵本である。地理の図誌に見立てて、京都の花街の妓や特色を説明した作品。描画に品があり、京都幕末花柳界の好資料である。

襦土一覽 2編2冊

醉斎子作・画 文政3年(1820)刊





熱田の飯盛女「お亀」の風俗を描いた洒落本。貸本屋大惣の注文によって書かれた作品。本書は作者の原稿本、現存は唯一本書のみである。作者は未詳ながら、一九の「膝栗毛」五編の画賛にこの名前があり、名古屋の戯作者グループの一人と考えられている。



うかれずめゆう ぎじま  
浮雀遊戯鳥 1冊

梧鳳舎潤嶺作 写 (文化3年(1806)序)

浄瑠璃、歌舞伎で知られた「お妻、八郎兵衛」の情話を熱田神戸の遊里に置き換えた郷土色豊かな洒落本。尾崎氏は「宮宿神戸遊里ものの最大最優秀の作」と評した。本書も大惣の貸本で、作者は未詳ながら、序跋者に名古屋の戯作グループが名を連ねている。三種の写本が確認されているが稿本はなく、本書がもっとも稿本に近い写本である。



えき かくしやうせん  
駅客娼穿 2冊

摸积舎作 写 (文化元年(1804)序)

囲われものと囲い主、そこからむ若い男という設定で、寛政年間末の名古屋を舞台とした作品。画者椒芽田楽は、当時の名古屋文壇の中心人物で、本名神谷剛甫。本業は医者である。作者爰于翁斎は、椒芽田楽等を中心とする名古屋の戯作グループの一人。本書は稿本で、この一冊しか確認されていない。



いた こわげ  
囲多好鬘 1冊

爰于翁斎作 椒芽田楽画 写 (寛政12年(1800)序)

名古屋の口入屋で待機中の女たちの情景を描いた作品。「なもし」など方言が数多く使用され、18世紀末の名古屋弁の状態を知る上でも興味深い。作者料理蝶斎も椒芽田楽や石橋庵真酔等と同好の名古屋の戯作者グループの一人である。

おんならんかん  
女楽巻 1冊

料理蝶斎作 写 (寛政年間)



湯女とその客の生態を中心に羽前庄内の湯屋の風俗を描いた作品。田川温泉に眼の養生に行った人物の見聞記で、地の文は擬古文、会話文は方言によって記されている。

ゆあか  
湯の阿賀 1冊

写 (寛政年間)

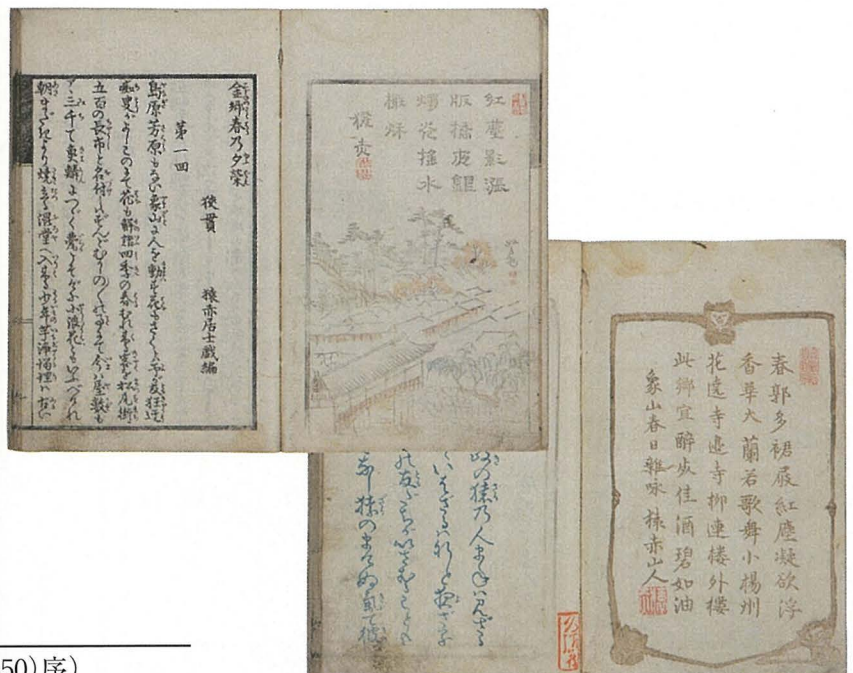


幕末期の異色作のひとつ。作者は、琴平を中心に活躍した侠客で、高杉晋作等を後援した讃岐の勤王家日柳燕石。口絵は、同郷の親友勤王家、鷲物こと美馬君田。

琴平の風俗地帯を中心に自らを主人公として描いた34才の時の作品。尾崎氏は「方言を除外して江戸弁を以て描いたことが唯一の欠点」と評した。出版は、京、大坂の版元に依頼したものらしいが、少数数出版で、口絵の色摺は初摺または特別摺で極めてめずらしい。

こがねのさとる ゆうばえ  
金郷春の夕栄 1冊

猿赤居士作 鷲物画 刊 (嘉永3年(1850)序)



ベストセラー『東海道中膝栗毛』で知られる十返舎一九を主人公とした、名古屋から秋葉山参詣の紀行文。一九の自伝的小説とも言え、尾崎氏は、「実験小説の好標本」と称した。

あきばさんほうらいじいっくがみちのき  
**秋葉山鳳来寺一九之紀行** 2冊  
 十返舎一九作 文化12年(1815)刊



弥次、喜多に似た名古屋の男二人、うんつく太郎兵衛とたらふくの孫太が、津島神社への参詣道中の滑稽を描いた作品。十返舎一九の『東海道中膝栗毛』のヒットによって各地で作られた道中記もののひとつ。名古屋および近在の方言がふんだんに登場する。作者の石橋庵真酔は、本業は彫り師、椒芽田楽とならび19世紀前半に活躍した名古屋の戯作者グループの中心人物。一九とも親交があり、後編にはちょうど名古屋の版元に滞在していた一九が序と推薦の辞をよせている。

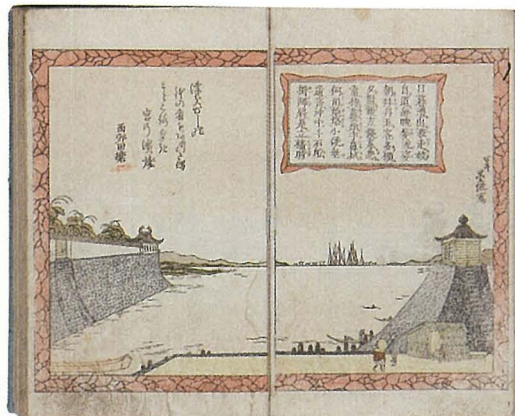
つしまみやげ  
**津島土産** 初編・後編 4巻4冊  
 石橋庵真酔作 梅亭華溪等画 文化11年(1814)・13年刊



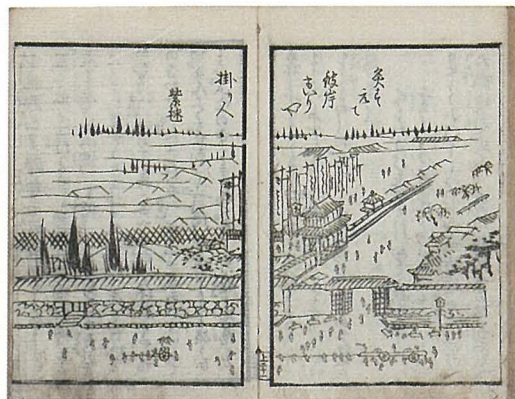
上方見物の膝栗毛もの。熱田宮の渡から桑名、四日市をへて土山宿あたりまでを描き、未完で終わっている。作者真酔と画家華溪との上方旅行を題材に名古屋に長期滞在中の江戸者二人の道中記に仕立てたもので、二人の江戸弁、宮の渡の船頭の熱田弁、その他の伊勢弁がかき分けられている。

こっけいえきろのうめ  
**滑稽駅路梅** 3巻3冊  
 石橋庵真酔作 梅亭華溪画 天保3年(1832)刊





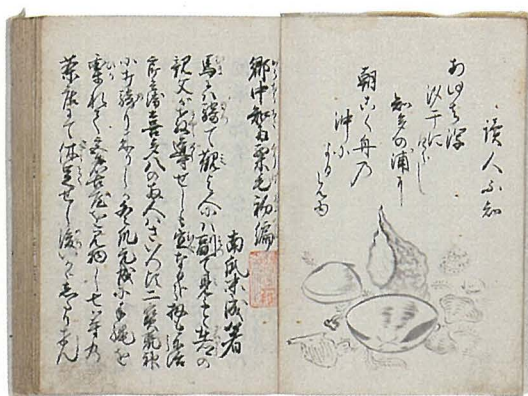
一九の『東海道中膝栗毛』が、宮の宿(熱田)から船で桑名へ渡ってしまったことを残念に思って書かれた作品。弥次と喜多が熱田の町の見物から熱田神宮を参詣、名古屋の町に入って、別院や、大須観音に参詣する筋立てとなっている。作者は、江戸の人であったが、当時名古屋に在住しており、挿絵は、名古屋の画家牧墨僊である。下段左端は、販売に際して掛けられた筒状の袋「書袋」である。



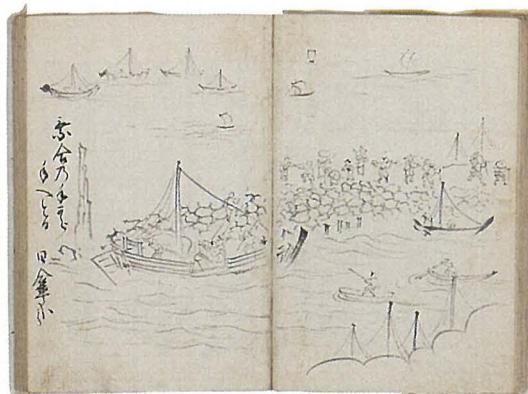
書袋

しへんのとじたし  
四編之綴足 2編4冊

東花(冬瓜)元成作 牧墨僊画 文化12年(1815)・13年刊



弥次と喜多を主人公に名古屋の七ツ寺から広小路、柳薬師へ参詣して舟で大野へ海水浴へ向かうという趣向。大野の町や祭礼見物の様子が描かれている。作者南瓜末成は、知多大野在住の清水治兵衛。『四編之綴足』の続編の意味もあり、作者冬瓜元成をまねて南瓜末成と称した。



こうちゅうち たくりげ  
郷中知多栗毛 初編 2巻2冊

南瓜末成作 写 (天保14年(1843)序)



おりすけ とろくさい  
折助と都鹿齋の開帳でにぎわう甚目寺参詣の珍道中記。見せ物小屋の口上や開帳の絵解き、折助と都鹿齋と彼らのかけあいなどが描かれる。現在、2種の写本が確認されるのみ。  
「能知亭折助噺」と読むとも考えられる。

ふうりゅう 甚目寺参詣の記 [能知亭折助噺] 1冊  
高力種信作・画 文化6年(1809)写

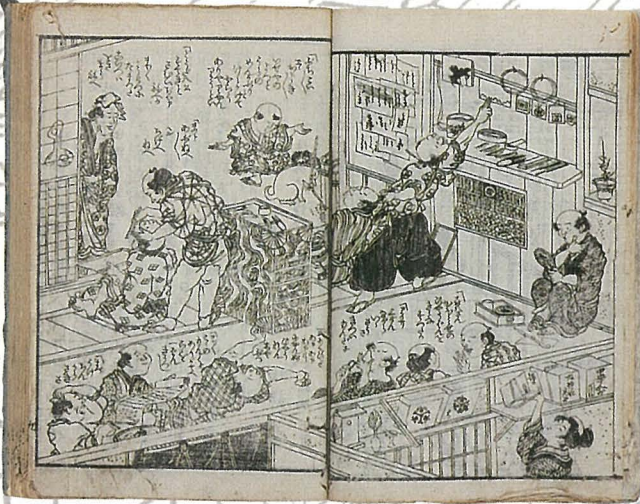


「竹林の七賢人」ならぬ名古屋の遊び人七変人の甚目寺をめざしての観音参詣道中記。枇杷鳥橋にさしかかった辺りで未完となっている。大須観音やその周辺の商店のにぎわいなど初観音詣で混雑する道中で起こる滑稽が描かれる。作者南窓山人は、名古屋鈴屋町の住人という。

しちへんじん  
七変人 2編上 1冊

南窓山人作 写(弘化4年(1874)序)

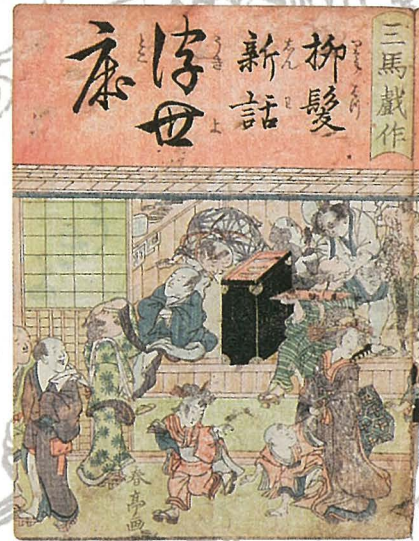




『浮世風呂』と並ぶ式亭三馬の代表的滑稽本。浮世風呂の隣の浮世床を舞台に、庶民の社交場でもあった髪結床に集まる人々の順番を待つ間の無駄話を書き連ねることによって、当時の庶民の生活を描いている。色摺は、販売の際に書店がかけた書袋(筒状になった包み紙)である。

うきよどこ  
浮世床 初編上 1冊

式亭三馬作 歌川国貞画 刊(文化10年(1813))



書袋

『浮世床』と並ぶ式亭三馬の滑稽本の代表作。男湯の「朝湯の光景」「午後の光景」、女湯の「朝湯より昼前のありさま」など、各篇のまとまった場面を時間の経過に従って並べられ、各場面は、登場人物の会話の応酬の写実描写によって当時の世相、流行を描いた作品。三馬と親交のあった寄席咄の創始者初代三笑亭可楽の銭湯咄を文芸化したものと言われる。

うきよぶろ  
浮世風呂 初編下 1冊

式亭三馬作 歌川国貞画 刊(文化6年(1809))





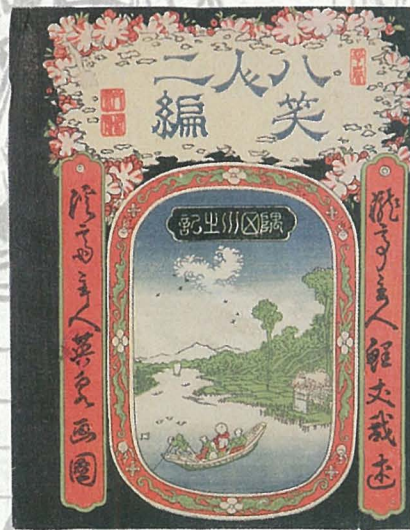
かつぎ上戸、あくたい上戸、くどくなる上戸、小言上戸、泣き上戸、意見上戸、腹立ち上戸、理屈上戸、さわぎ上戸など12種類の酒癖を挿絵入りの写実的な独白体で描いた作品。当時の身振り、物真似芸の名人桜川甚幸に与えた台本であったとされ、現在でも咄家がマクラに使う酔態描写のもととなっている。色摺は書袋である。

無而七癖酩酊氣質 3冊

式亭三馬作 歌川豊国画 刊 (文化3年(1806)年序)



書袋



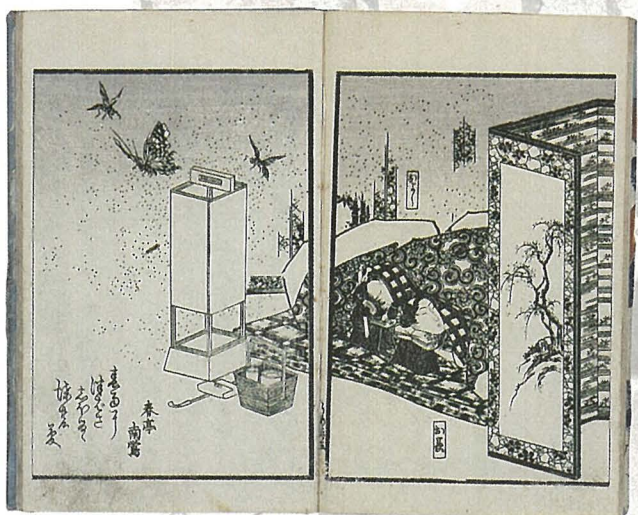
書袋

式亭三馬に続いて登場した滑稽本作者滝亭鯉丈の代表作。鯉丈は噺家出身で、江戸市民の娯楽として流行した茶番狂言の趣向によって笑いをねらった。卒八、案波太郎、野呂松等8人が人目をひく茶番劇を企てるが、自分たちが茶番になってしまい笑いを誘うという趣向である。この内、敵討の茶番は、現在も落語の題材として上演されている。色摺は書袋である。

花暦八笑人 5編7冊

滝亭鯉丈作 溪斎英泉等画 嘉永2年(1849)刊





しんしよくめごよみ  
春色梅見誉美 4編 12冊

狂訓亭主人(為永春水)作 柳川重信等画  
天保3(1832)・4年刊

女性向けの恋愛長編小説「人情本」の代表作。

丹次郎、芸者米八、許嫁お蝶、芸者仇吉等を中心に恋愛模様が展開する。

丹次郎は、色男の代名詞となり、男性も含めて青年の愛読書となった。米八と仇吉は錦絵となり、名古屋では、仇吉を名乗る芸者があらわれた。

ベストセラーとなった『春色梅見誉美』は、5年間にわたって次々と続編がつくられ、全60冊に及んだ。本編で十分描ききれなかった三人の主人公米八、仇吉、丹次郎をめぐる恋の駆け引きを描いた続編『辰巳園』、さらにその続編『英対暖語』。「恵の花」は、登場人物の前身を説く発端編にあたる。







第七回の上  
江戸 狂訓亭主人著



春色辰巳園 2編巻4 1冊

狂訓亭主人(為永春水)作 歌川国直画  
天保5年(1834)刊



第一回  
江戸 為永春水著



英対暖語 卷1・2 2冊

狂訓亭主人(為永春水)作 静斎英一画  
天保9年(1838)刊

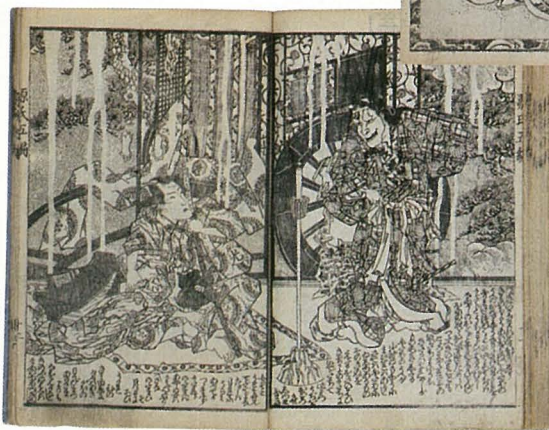


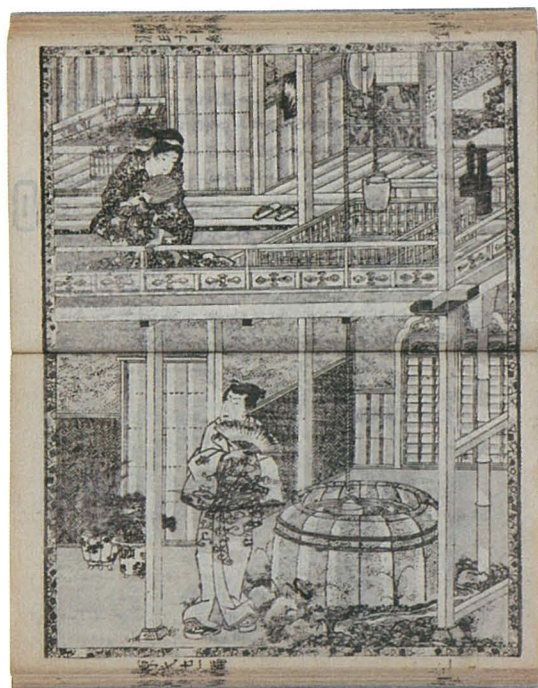
第一回  
江戸 狂訓亭主人著



春色恵の花 2編6冊

狂訓亭主人(為永春水)作 溪斎英泉画  
天保7年(1836)刊





娯楽性の強い挿絵入り長編小説「合巻」のなかでも最大のベストセラー作品。古典『源氏物語』の翻案により「僞紫」は「似せ」または「偽紫式部」の意味。「田舎」は、「卑俗」「まがい物」の意味を含んでいる。足利義正（桐壺帝）と寵妾花桐（桐壺の更衣）の遺児光氏（光源氏）が紛失した將軍家の宝刀小鳥丸と勅筆の短冊等を取り戻すべく、奸臣一味と闘いその方便として様々な奥女中や武家娘達と奔放な恋愛を展開する。

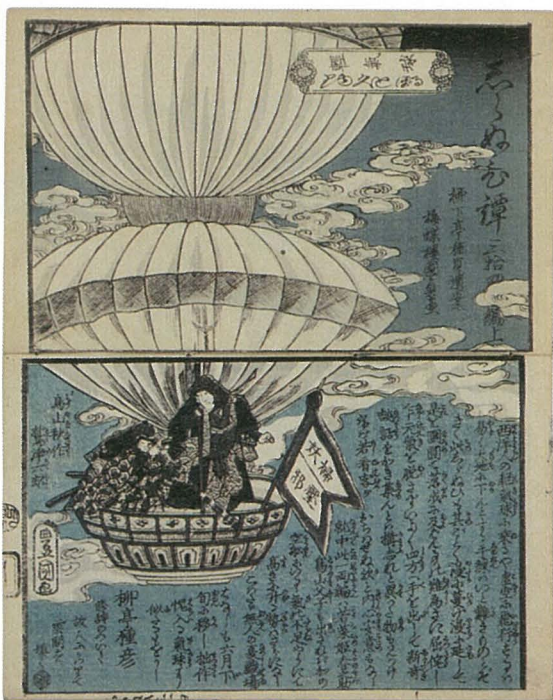
歌舞伎調の演出、国貞による華麗な挿し絵があいまって熱狂的な読者の好評を得るが、好色な当代將軍家斉の大奥を描いたという風説によって絶版を命ぜられた。しかし、天保の改革の肅清気分が治まると続編が次々と創作され、光氏風の風貌の主人公を活躍させる作品が数多く輩出した。また、錦絵にも田舎源氏を題材にした作品が流行し、「源氏絵」の分野を生み、舞台化された作品も多い。

本書は、より美しいもの、完備した形のもの求めた尾崎氏が収集した合巻のなかでも自慢の蔵書のひとつであった。

にせむらさきいなかげんじ  
僞紫田舎源氏 38編 19冊

柳亭種彦作 歌川国貞画 文政11(1828)～天保13年(1842)刊





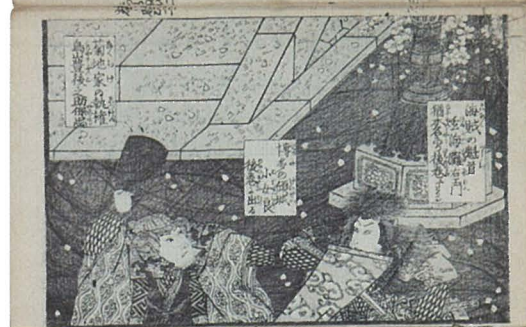
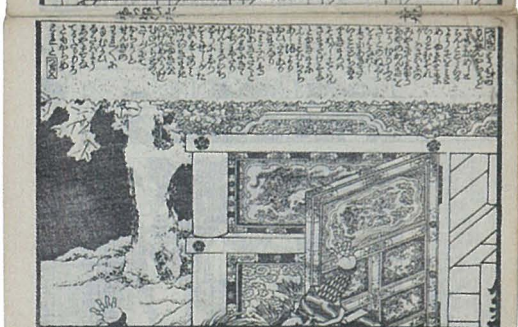
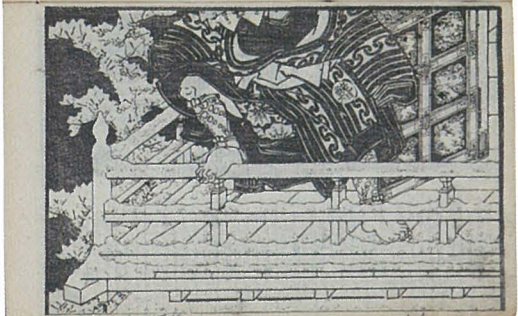
「合卷」のなかで、最大の長編合巻。本来90編のところ完結せず、71編まで刊行された。作者、絵師も3～6人に及んでいる。

黒田家のお家騒動と天草の乱の実録に取材し、艶情と妖気の錯綜する長編伝奇小説。刊行後まもなく評判となり流行合巻の最上位となった。嘉永6年(1853)には、河竹黙阿弥により劇化され、「しらぬい譚」として上演された。さらに、これを題材とした錦絵も数多く作られた。

しらぬいものがたり  
白縫譚 70編 35冊

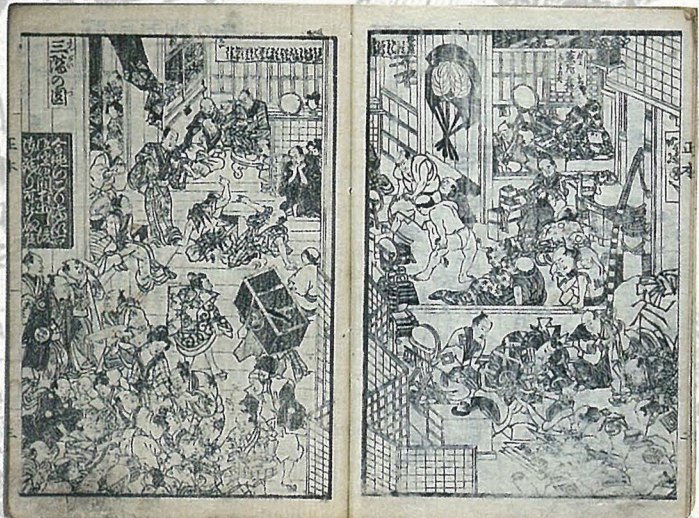
柳下亭種員等作 歌川豊国等画  
嘉永3～5年(1850～52)刊







書袋

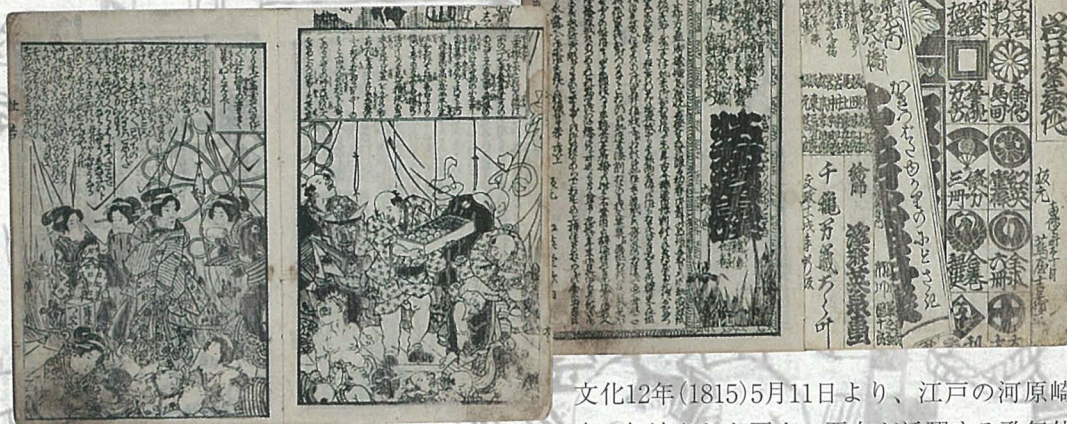


合巻が長編化するきっかけとなった作品。本書は2冊で完結で出された当初の形式の初版本。本作の好評により、同じ作風の小編、中編が次々作られ『正本製』として12編の合巻となった。「戯作元来劇場にひとし」「趣向は浄瑠璃、世界は歌舞伎」などと言われるように歌舞伎と合巻は、密接な関係にあり、合巻には、歌舞伎の表現、描写が取り入れられた。正本とは、歌舞伎の脚本のことで、正本製とは、脚本ふうに仕立てた合巻の意味である。文章の脚本模倣だけでなく、口絵、挿し絵に舞台機構、大小道具描写を使い、登場人物の顔を人気役者に似せるなどの工夫をこらした。主題を変えて、17年間書き継がれたロングセラーである。右上色摺りは書袋。現在中村屋の定紋となっている中村屋の槽紋が大きく使われている。

しょうほんじたてがくやのつづえ  
**正本製楽屋続絵 2編2冊**

柳亭種彦作 歌川国貞画 文化12年(1815)刊

※書袋：販売に際して書店がかけた筒状の袋



かきつばたゆかりのにとぎき  
杜若紫再咲 3編3冊

岩井象三郎作 溪斎英泉画 文政11年(1828)刊

文化12年(1815)5月11日より、江戸の河原崎座で初演された悪人・悪女が活躍する歌舞伎「杜若艶色紫」の台本をそのまま採用した合巻。表紙や挿絵によって歌舞伎の実況中継のような趣向が取り入れられている。

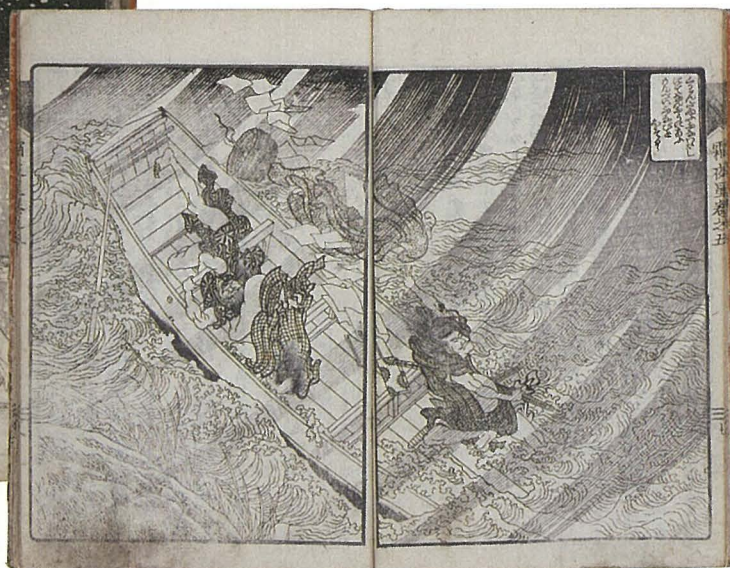


お家騒動を題材に、二つの敵討ちが展開する。「近世崎人伝」に登場する文展狂女や手車之翁を中心に、江戸時代初期の様々な芸人を登場させるなど、作者の考証随筆趣味が反映した山東京伝晩年の代表作である。

きんせいびじんでん  
琴声美人伝 5編6冊

山東京伝作 歌川豊国画 文化13年(1816)刊



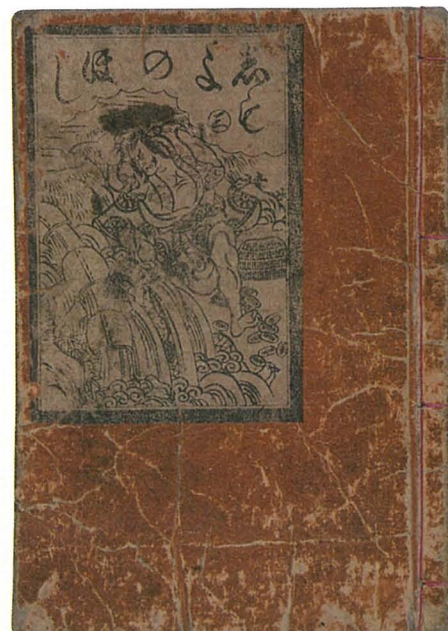


かつての恋人同士お花と伊兵衛は、伊兵衛の妻お沢をだまして自殺に追いやり、めでたく所帯を持つが、お沢の怨霊が二人を追いつめる。この筋立ては、鶴屋南北の『東海道四谷怪談』と同じ元禄時代に起きた実際の事件を素材としている。

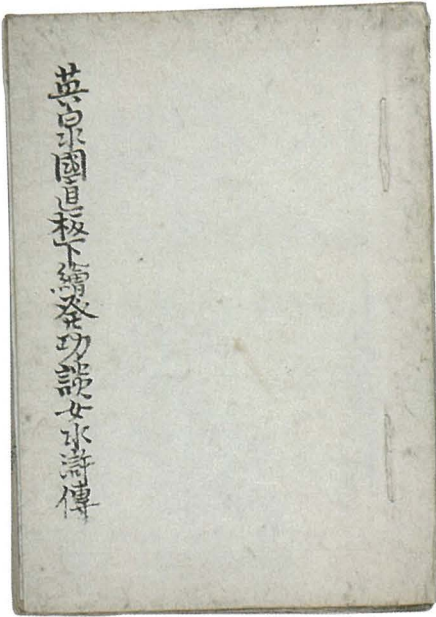
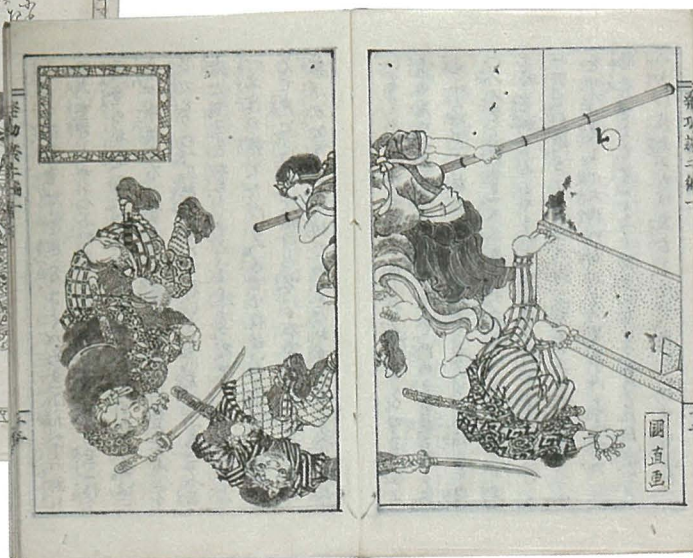
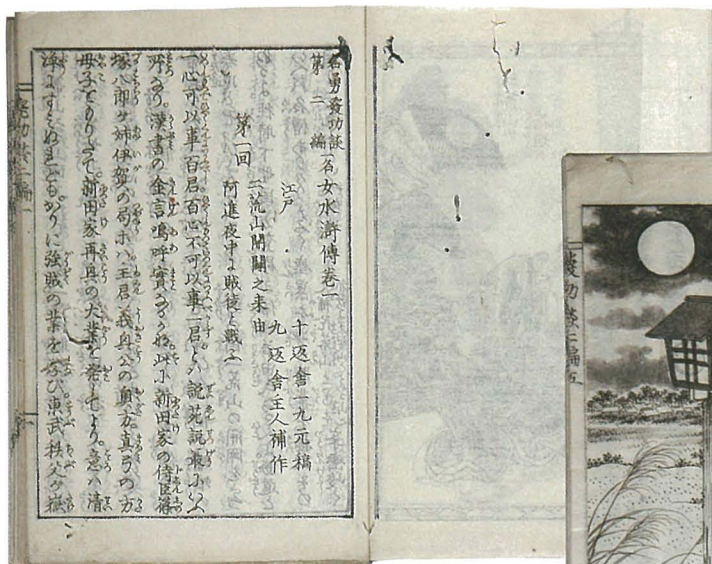
北斎による挿し絵の妖怪画が、圧巻。北斎の挿し絵は封建道徳を軸に複雑な筋立てが壮大に展開する読本の人気をささえたときといわれる。本書は、また丹表紙に鳥居清経風の題箋が残る初版本である。挿し絵には、重ね刷りによる墨の濃淡だけで表現された鬼気迫る怨霊の世界が鮮やかに残る。尾崎コレクションの名品といえる逸品である。

近世怪談霜夜星 5巻5冊

柳亭種彦作 葛飾北斎画 文化5年(1808)刊







木版に彫られる前に作成される版下本。挿し絵は、尾崎氏が注目した浮世絵師溪斎英泉の肉筆画として珍しいものでもある。馬琴作の読本『女水滸伝』とは異なる一九の作品。本書は刊行されなかったらしく、この他にもう一種版下本が残るのみである。

めいゆうはっこうだんだい に へんおんなすい こでん  
 名勇發功談第二編女水滸伝 卷1・5 1冊  
 十返舎一九作 溪斎英泉画 写

## 浮世絵

### 美人画と役者絵

江戸の戯作文学書とともに、尾崎氏のコレクションを代表するのが江戸後期の浮世絵です。

「自分は、浮世絵が専攻ではない、ただ好きというだけである。が、なぶっている江戸期稗史(小説)類とこの浮世絵とは不離の交渉にいる。」と尾崎氏自身が語ったように、江戸の文芸は画文一体、戯作は、文章だけでは成立しません。浮世絵師が、挿絵を画き、華やかな錦絵で合巻の表紙を飾りました。時には絵師が戯作者をやり、戯作者が挿絵を画くこともありました。尾崎氏のコレクションは、浮世絵だけでも、戯作だけでも語れないのです。

尾崎久弥コレクションの浮世絵3000点は、現在名古屋市博物館の所蔵となっています。

ここでは、この中から、尾崎氏の研究によって一躍脚光を浴びることになった英泉の美人画、国貞と国芳の役者絵など、人情本や合巻の挿絵画家でもある江戸後期の浮世絵師の作品を紹介します。



腕を組み、伏し目で物思いにふける女の表情を艶やかに描く。尾崎氏が主著『江戸軟派研究』に掲載した一図である。尾崎氏は、浮世絵の中でも、「挑発的で蠱惑的な眼や素振りをもった」英泉の美人画に注目し、その「退廃美」を高く評価した。

いまようびじんじゅうにけい あたごやま しんきそう  
今様美人拾二景 愛宕山 しんきそう

溪斎英泉画 和泉屋市兵衛版

松の名木になぞらえた美人画のシリーズ。猫背気味で、下唇が厚く、下顎が出た顔は英泉の美人画の特徴である。「新吉原 扇屋」と白く染め抜いた暖簾越に向こうを見る女の無防備な表情を捉える。きもの柄には、顕微鏡で覗いた雪の結晶—雪華模様—が取り入れられている。

えど まつめいぼくづくし おしあげみょうけん まつ  
江戸の松名木尽 押上妙見の松

溪斎英泉画 江戸屋松五郎版



「東海道五十三次」にならい、吉原の花魁を描いたシリーズの一枚で、花魁の名から文政8年(1825)夏の作とわかる。

昨夜をともに過ごした男からの手紙だろうか、布団にしどけなくもたれ、文を読む扇屋の遊女・司の姿を描く。何気ない仕種の中に見せる素の表情が情感豊かに捉えられている。

けいせいどうちゅうすころく みしま みたて こじゅうさん  
契情道中双禄 三島 見立よしわら五十三つみ  
おうぎや ないつかさ  
扇屋内司

溪斎英泉画 蔦屋吉蔵版 文政8年(1825)



縦二枚続の画面いっばいに描かれた花魁おいらん(格式の最も高い上級遊女)。鯉の滝のぼりの図柄を大胆に染め上げた打掛が見事である。首が詰まり、S字を描く女性の姿態は「猫背猪首」と呼ばれる英泉独特の描画スタイルである。藍摺による異版が知られる。

花魁 鯉 2枚続

溪斎英泉画 佐野屋喜兵衛版



足元を突風にあおられるうら若き娘を描く。着物の裾をしっかりと握りながらも、抗いがたい風に身をくねらせる娘、風にはためく着物の裾。いたずらな突風が見せた一瞬の出来事を動勢豊かに捉えた一図である。

むすめ 風 2枚続

溪斎英泉画 丸屋甚八版

天保2年(1831)と翌3年に相次いで亡くなった三代目坂東三津五郎と五代目瀬川菊之丞の死絵。死絵は、有名な歌舞伎役者の冥福を祈って版行される浮世絵で、日時や享年・戒名などと役者の似顔絵が淡い色調で描かれる。

ばんどうみつごろう せがわきくのじょう  
坂東三津五郎と瀬川菊之丞

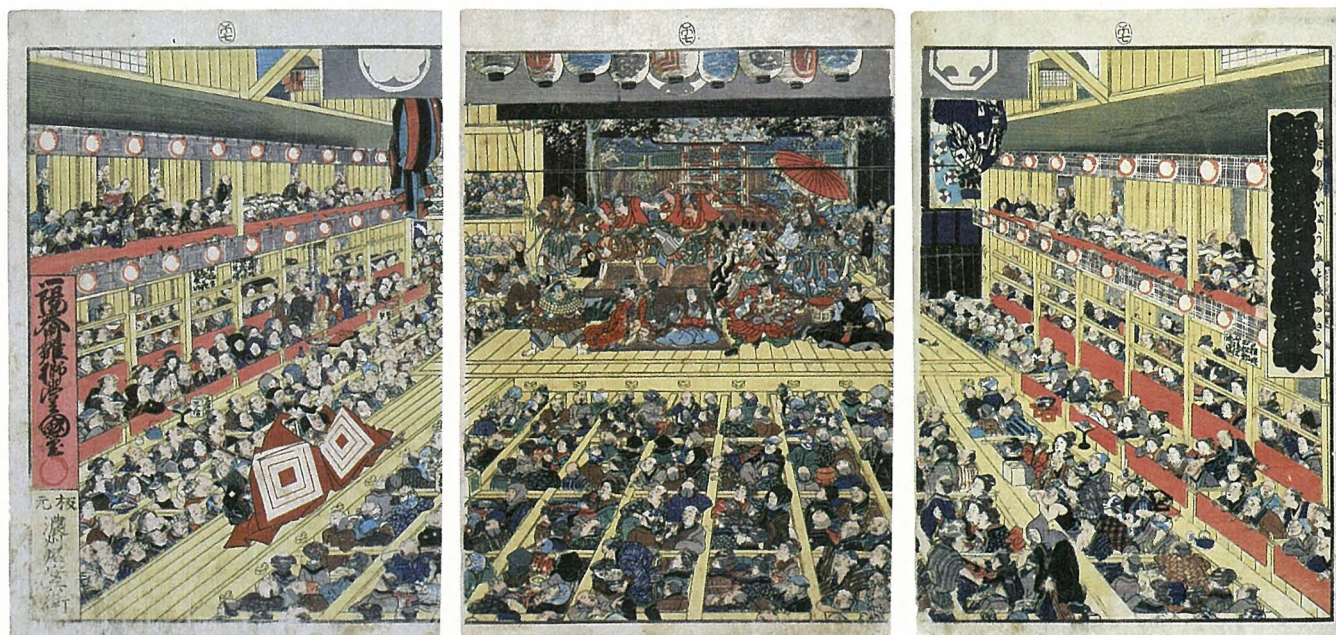
歌川国芳画 山口屋藤兵衛版 天保3年(1832)



安政5年(1858)7月に江戸市村座で上演された「暫」の舞台情景を西洋画の遠近法を用いて描く。花道で暫を演じるのは、初代河原崎権十郎、後の九代目市川団十郎である。

おどりけいよう え どのさかえ  
踊形容江戸絵栄 3枚続

歌川国貞画 能州屋安兵衛版 安政5年(1858)





たそがれ・<sup>あしかがじろう きみ</sup>足利治郎の君・<sup>あこぎ いきりょう</sup>阿古木の生霊 3枚続

歌川国貞画 山田屋庄次郎版 嘉永4年(1851)

嘉永4年(1851)9月に市村座で上演された「源氏模様娘雛形」<sup>ふりぞで</sup>を描く。光源氏を模した足利治郎の君を八代目市川団十郎が演じて大当たりとなった。



<sup>そがのなかむらあきのとりこみ</sup>「曾我中村穰取込」の舞鶴屋伝三に扮する三代目坂東三津五郎(1775~1832)。文政9年(1826)中村座の初演では、市川団十郎が一人二役で演じた役である。

<sup>ばんどうみつごろう まいづる でんぞう</sup>坂東三津五郎の舞鶴や伝三

歌川国貞画 佐野屋喜兵衛版 文政12年(1829)